

本屋を殺す電子本

「伏流水」 20130427

電子書籍が近年注目を浴びています。筆者も某米系書籍販売会社のリーダーを「愛用」しています。その利点を数えればそれこそ際限が無いほどあります。

書籍は、「読むもの」としての性格ばかりが強調されてきました。が、「見るもの」や「引くもの」という性格もあります。絵本や図鑑は見るものとして、六法全書や歴史年表では引く性格が強調されます。加えて、マルチメディア化が進んできた今日では音や映像を「鑑賞するもの」としての性格も加わってきました。

読書人口の減少という出版不況が反対に出版点数の増加を招いてロングテール化が拍車をかけています。こうなると、街の小さな本屋さんでは気に入った書籍の入手が困難になります。このことが益々電子書籍化を進める原因になります。このままでは街の本屋さん、分けても地方の小売りの本屋さんの生きる道は非常に困難です。

筆者の持っている電子ペーパー型のリーダーは、衰えた視力に対して文字のポ

イントを拡大して読めることで読みやすく、長時間の読書にも疲労感がありません。インクの匂いが嗅げない欠点はあるものの大いに気に入っています。しかし、これで読んでいると近所の本屋のご主人や店員の顔が浮かんできて、私の良心を呵責します。そこで、今は漱石や龍之介、鷗外や藤村など、書齋に全巻揃っている全集本の、青空文庫のポランティアによる電子化作業の結果作られた電子版でかつ0円のものに限定してダウンロードしています。新刊の広告を見る度に取り寄せたい誘惑にかられます。電子本は、値段も運送費と紙代不要分だけ安く、クリック一つで手に入ります。地方の小さな本屋さんにも電子書籍の普及による利益が得られるビジネスモデルはないものでしょうか。このままでは、日本人という隠れ蓑を着た巨大外資系配給会社の一極寡占を招き、地方の富は東京へ、そしてそのままアメリカへと、TPPなど待たずとも「聖域」などそっちのけのグロババルな強者が富を吸い取るシステムが早晚完成を見ること請け合いです。